

タイトル…カッコウの父親殺し

あらすじ

母はおらず、父に育児放棄され、実質的に親のいない蓮。彼は、自分に良くしてくれる商店街の大人を「お父さん」と呼び、助けられながら暮らしていた。しかし小学校卒業を控えた三月、コロナ禍により商店街はシャッター街と化す。親をなくし、腹をすかせた蓮は、商店街の先にできたスーパーへ行くが、食べ物もろくにももらえず、追い出されてしまった。父は出かけており家にも入れず、空腹、寒さ、孤独にさいなまれた蓮は、スーパーで万引き行為を働く。それでも蓮を見ようとしないうちに、蓮は暴力を振るった。そのとき蓮は、父はすでに衰えていて、自分の方が強くなっていたことに気が付く。そこではじめて、蓮は父と向き合い、商店街のおっちゃんところで学び、作ったからあげをふるまうのだった。

カッコウの父親殺し

「お父さん？」

その言葉は蓮の口から半分無意識に出た。声を受け、精肉のおっちゃんは困ったような表情をして振り返る。

「ぼうず、今日は小学校どうした。それに俺はお前の父さんじゃねえよ」

頭にタオルを巻いた彼は、肉が並ぶショーケースから身を乗り出して、蓮の目線に合わせる。平日だから商店街は人が少なく、くたびれた服装の蓮の姿は浮いて見えた。

「土曜日のジュギョウサンカンの代わりに休み。お腹減った」

そおかそうか、とおっちゃんは答え、生肉とは別のショーケースを開けた。微かに花屋の香りがするだけの商店街に、急に食欲をそらせる揚げ物の匂いがした。出てきたあつあつのからあげを茶色の紙袋に入れ、蓮に渡してくれる。

「お代はいらねえよ」

そう言ったのと同時くらいに、蓮は紙袋を持って、走って行ってしまった。

「いつまでこんなこと続けるの？」

その様子を見ていた客のおばさんが、おっちゃんに言う。

「俺らが面倒見れるまで、だよ」

「でもそれじゃあ解決しないじゃない」

「じゃあどうすればいいんだよ」

蓮の後ろ姿はもう見えなくなっていた。

商店街入り口付近の精肉店から少し行くと、店先に並んだ植木鉢が見えてくる。今置いているのはダリアやアスターなどの赤紫っぽい秋の花。季節によって色合いも変わってくる。

「お父さん、お花」

そこでも蓮は、お父さんと呼んだ。

「ああ、蓮くん。いらっしゃい。お母さんの仏壇のお花ね。ちょっと待っててね」

そう言い、店の奥に引っ込んでいった。平日のせいもあるだろうが、相変わらず客が少ない。足を止めて店先の花を眺める人はいるけれど、買っている人を、蓮は見たことがなかった。丁寧に、きれいに育てられた花たちはどうなるのだろう、そんなことを考えた。

少しして、店員のお姉さんが戻ってくる。

「はい、これお花」

蓮はうん、とだけうなづいて、空いている左手で受け取る。そしてまた、商店街を歩き始めた。

商店街のちょうど真ん中にある小さな公園が、彼の定位置だった。砂の地べたに腰を下ろして、からあげを手づかみで食べ始める。学校がないと給食が食べられない。昨日の夕方、商店街の人がくれたお菓子をもらって、それっきりだった。

昼過ぎになると公園は、幼稚園児らしき子たちと、親が増えてくる。

音の鳴るくつを履いて、ただぐるぐると遊具の周りを走り回っている子を、蓮は体操座りをしてじっと見つめていた。ふと、その子がこけた。母親らしき人の方を向いてから、その子は泣き出す。ぼろぼろ大粒の涙を流し始めるのを見て、蓮は笑った。

樂しげに話していたママ友のうちの一人が、顔面蒼白になりながら駆け寄る。

「らいや！ ちょっと大丈夫!？」

よかった、血は出てないみたい。そうつぶやきながら、こけた子の体を起こして、彼女は抱っこした。

「はいはい、痛かったねー。痛いの痛いの飛んでけー!」

揺らしながらあやしていると、その子だんだん泣き止んで、痛みを忘れ笑い出した。

蓮は持っていた枝を投げ捨てた。

みんなの話し声や笑い声がまたしだす。蓮は不意に立ち上がり、じっと楽しそうな親子を見つめる。そして転んだフリをした。まわりの声はなにも変わらなかった。誰も来なかった。蓮はしばらく地面にうつぶせで寝そべったままだった。泣くことはしなかった。

陽が差してきて、少し寒くなってくる。この時間帯、商店街は全体に影がかかる。

蓮は起き上がって、砂で色が変わった服をはたきこともせず、地面の仏花を拾った。人が少なくなってきた公園を後にし、また商店街の道を帰っていく。制服を着た何組かのカップルたちが、自転車で下校していた。その波に逆行しながら歩く。

蓮は小さく身震いをした。この前の風と、ずいぶん様相が違う。彼にもはつきり分かった。冬が来る。そして、ずっと外にはいられなくなる。

家の玄関は、鍵がかかっていなかった。父は帰ってきているらしい。くつを脱いでいるとひとりでに玄関の戸が閉まった。家の中は、光が入ってこない分、外なんかよりずっと暗い。その差に慣れない目で廊下を歩いていると、足に何かあたった。空の酒瓶だった。家中、む

せかえるほどの酒と、カップ麺の濃い匂い。キッチンのシンクや、コンロの上まで、中途半端に汁の残った容器が積み重なっている。かろうじて一つ、お湯を沸かすところだけが空いていて、近くの容器が熱で溶けていた。

部屋の前を静かに通りながら見ると、父は背を向けて寝ていた。基本的に、父は家のことをしない。料理はおろか、掃除も洗濯も。買い物すらろくに。蓮の母がいたころからそうだった。夕食どき、酒を片手にテレビを見てゲラゲラ笑って、皿を運ぶこともしない人だった。蓮はもらってきた花を、砂を払ってから仏壇に供える。数年前に母が死んでからだ、こうなったのは。家族旅行の最中、高速道路で逆走車と正面衝突を起こした。偶然にも父と蓮は軽症で、助手席の母だけが亡くなった。

その後父は仕事を辞めた。今では日雇いの仕事でかろうじて食いつないでいる。家事や育児を一切知らない父だから、すぐ暮らしは荒れた。父は蓮に見向きもしなくなった。たぶん、あの日、父も一緒に死んだんだ。

蓮の腹が小さく、鳴った。

「お父さん、からあげちょうだい」

「ぼうず、おまえなあ。俺はお父さんじゃねえよ」

寒さがかなり肌を刺すようになってきた。家にある冬物の服は、最近サイズが合わなくなってきた。くつも底がはがれかけていた。

「ほらよ、寒そうだからメンチカツ一個おまけだ」

蓮は、おっちゃんの手から紙袋をひったくるようにして取った。おっちゃんは小さくため息をつく。

「最近こちら辺に引っ越してきたママさんたちが気味悪がってますよ」

少し冷ややかな目をした客が言う。

「そんなこと言ってもなあ」

タオルの上から、おっちゃんは頭をかいた。

「ほら、児童相談所とか警察とか、あるじゃないですか」

「したさ、前に。児童相談所の人が家に行ったらしいのに、次の日もぼうずが来るから、もっかい電話した。そしたらなんて言ったと思う。最近困ったことないですか？ とお父様に聞いたところ、いえ、……なにも。と返ってきたので、って。それにお父様も昔虐待がどうのこうの、本当に支援がいるのはお父様だとか、親子の問題だとか、話にならなかったんだよ」

「そんな、でも」

「困ったときに電話して来いって、番号は渡してあるよ」

曇り空。大きく息を吸うだけで、肺が一瞬で凍り付いてしまいそうだった。まだ幼稚園児も公園に来ていない昼間。それでも、もう外にはいられない。からあげで暖まった腹もすぐ、冷えてしまった。蓮は体をさすりながら、帰路につく。

家の前まで来て感じた。いつも静かだけれど、今日は一段とそうだ。人の気配がしない。玄関に手をかけて、返ってきたのは固い手ごたえだけだった。

前に一度、鍵を外で落としてしまったことがあって、取り上げられた。けれど、これまでそこまで不自由を感じたことはなかった。蓮は家にいたくなかったし、外で遊んで時間をつぶしていればよかったから。でも――。

「……寒い」

涙が湧いてきて、でも目の中に納まったまま、こぼれなかった。良くしてくれた母が亡くなって、少ししたときのことを思い出す。家に父と二人住んでいるはずなのに、ものすごく孤独で、そのたびによく泣いた。そうすると毎回、「男のくせにグズグズ泣くな！」と怒鳴られた。父は母の葬式でも、じっと遺影を見つめたまま泣かない、そんな人だった。怒鳴られても、蓮は何度も泣いた。怒号であっても、誰にも構われないさみしさよりは怖くなかった。けれど、その声すらだんだんなくなって、ただ静かに舌打ち一つ返ってくるようになって、次第にそれすら消えて完全に無視されるようになった。

玄関の前に体操座りをして、重い雲がゆっくり流れていくのをぼーっと見ていた。

どうして寒さはここまで痛く、体に染みるのだろうか。でも、商店街に戻ることとはしなかった。家しか寒さを凌げる場所を知らなかった。

鍵を開ける音で目を覚まし、顔を上げる。家に入っていく父の背中が見えた。もうすっかり、夜だった。

*

家を出たのは久しぶりだった。

小学校卒業を控えた二月末に、急にこれから学校が休みになると言われた。親のいない小

規模な卒業式だけやって、長い長い春休みになった。

まだ外も少し寒い。なによりあの日、このまま父は帰ってこないんじゃないか、家を失うんじゃないかと不安になって外に出られなくなった。ヒマの潰し方なんて知らないから、家の隅でゴミに囲まれて、ずっと体操座りをしていた。

所々塗装が剥がれて下の鈍色がのぞく商店街入り口のアーチをくぐる。こんなに静かだったつけ。石のタイルが張られた道を歩くと、底の剥がれたくつがぺたぺた間抜けな音を立てる。

いつもの精肉店まで来て、あれ、と思う。シャッターが閉まっていた。足元を見ながら歩いていた蓮は、はじめて前を向いた。消失点を結ぶところまでずっと、シャッターが続いていた。どこも開いていない。誰もいなかった。

「お父さーん？」

手書きのメニュー看板が放置されているさびれたカフェ。止まった床屋のサインポール。シャッターのない店も軒並み閉まっていた。

ぺたぺたぺたぺた、自分の足音だけが聞こえる。お腹が鳴った。

「お父さーん、どこー？」

杉玉がぶら下がった酒屋。シャッターの前に置かれたままの植木鉢。以前父と散歩してよく立ち寄った時計屋。腕時計に夢中になる父をよそ目に、蓮は大きい古時計に目を奪われていたのを思い出した。百年も前の物で、修理を請け負ったのだと聞いた。自動ドアは開かず、店内はひどく暗かった。あの古時計は、まだ止まっていた。

公園にも誰もいない。いつもより広く感じる公園の真ん中で、蓮は大の字に寝そべった。

しばらくそのままできて、お父さん……とうとう一度だけ呟いた。そのとき急ににゅつと、蓮を覗きこむ顔があった。蓮はびくつと体を震わせる。同い年くらいの男の子だった。

「君もお父さん待ってるの？ オレも同じー」

「同じ？」

寝そべったまま蓮は聞いた。

「オレお父さんと二人暮らしなんだけど、いつつも帰ってくるの遅くて一人なんだ。君は？」
答えるまで一瞬間が空く。

「ぼくはお父さん……いないよ」

「……そうなんだ。一緒に遊ぼうよ！」

小さくうなづいて、蓮は起き上がった。相変わらず公園は静かだ。でも寂しくなかった。

「オレずっと一人だったんだ。家誰もいねーし、友達もできなかったし」

すべり台の付いている遊具に登りながら、彼は言った。

「ぼくも」

ずんずん登っていく彼の後を追った。

「マジ？　じゃ一緒だ」

遊具の一番上まで登ると、彼はうでを突き上げてバンザイした。同時に大きくお腹がなつて、その子は恥ずかしそうに笑った。

「今日ご飯食べてないんだよね」

蓮の腹もぐうと鳴った。同じだと思った。

彼はすべり台を降りていく。蓮も続いた。夕方になるまでずっとそれを繰り返した。お腹が減ったのも忘れるくらい。

同じ年くらいだと思っていたはるとが三個下の小学四年だったことは、後から知った。

「はるとー！」

その声に、彼は勢いよく振り返った。後ろにいた蓮には、彼の表情が見えなかった。

「お父さん!!」

蓮は目を見開く。

「どうしたの！　今日帰ってくるの早いね」

はるとは走って行って、父に抱きついた。

「はるとが心配だな。たまには早く帰らないと思って。そっちの子は」

「今日始めて会って友達になったの。そうだよねー？」

蓮は答えなかった。変わりに、空っぽなことを思い出した胃がないた。

「蓮、お父さんがいないんだって」

「そうか、お腹減ってるだろうし、うち、来るか？　夕飯作るぞ」

「いいの!？」

蓮は目を輝かせた。

分譲住宅が並ぶ商店街から一本外れた道に、はるとたちの家があった。蓮の家と、同じ見た目をしていた。

はるとの父が鍵を取り出して、玄関を開けた。同じような廊下が現れる。でも匂いが全く違

って、それだけでどこか異世界のように感じられた。蓮は二人に続いて中に入っていく。はじめてのことで、何と言っているかわからず無言だった。

「すぐ用意するから、蓮くんは自分の家だと思ってのびのび過ごしてくれ」

蓮は喜んだ。少ししてサクサクトントン知らない音が鳴りだして、蓮はそっちへ行く。少し高いキッチンに身を乗り出して、野菜たちが切られていく様子を眺めた。次に真っ白で大きな冷蔵庫が気になって、勝手に開けてみる。ジュースを出そうとして、こちらと怒られた。冷蔵庫の中身を見るのにも飽きて、廊下に出る。気になった部屋のドアを開けるとそこには、勉強机があつて周りにおもちゃが転がっていた。蓮の家でここは、父の部屋だった。自分の部屋があることを羨ましく思う。母の部屋はもう使っていないのに、父は蓮にそこを使わせなかった。

全部の部屋のドアを開けて、クローゼットまで物色していたとき、はるとの父にごはんだそ、と呼ばれた。ダイニングに戻ると、いい匂いがした。商店街で嗅いだことのあるそれとも似ているような気がした。

食卓には、炊き立てのごはんやみそ汁、肉じゃがなどが並んでいた。きちんと三人分取り皿が用意され、蓮の前にも置かれた。ここ数年、見ることでできなかった光景だった。

いただきます、と手を合わせる二人をよそに、真っ先に蓮は肉じゃがをかきこむ。

「はは、食いつぶりいいけど落ち着いてな。ご飯は逃げねえから」

父は笑ってそう言った。一口ご飯を食べたはるとが、茶わんを片手に持ったまま話し始める。

「お父さん、今日公園でね、でっけーモンシロチョウいてね」

「そうかそうか、もう春になるもんな。お父さんが子供のころもよく虫取り網振り回したもんだ。どうだ、夏休み早起きしてカブトムシでも捕りに行くか！」

「行きたい！ カブトムシ！ 絶対だからね」

「ああ、約束だ」

机の向かい合った二人ばかり話し出して、うち来るかと言ってくれた父は蓮の方を見なくなった。

「ねえ！ ぼくね、ぼくね」

蓮は声を割り込ませた。

「むかしお母さんが死んじゃってね、でねお父さんもいなくて、ずっと寒くてお腹空いててね。それで、それでね、ぼくかわいいそうでしょ」

「え、う、うん。今はると話してるからな、ちょっと待っててな」

「なんで？　なんでぼくとは話してくれないの？　なんではるとくんだけなの？」

話しながら、肉じゃがを口に詰めた。おいしくて、温かった。

「いや、だってはるとは息子だけど、蓮くんはよその子じゃないか……」

蓮はきよんとする。

「どういふこと？　ねえ、お父さん」

はるとの父の顔が引き攣ったのに、蓮は気が付かなかった。

ご飯を食べ終わったら、もう帰りなさいと言われた。脱ぎ捨ててあったボロいくつを履いて、蓮は追い出されるようにして、外に出た。まだ食べ足りなくて、お腹が鳴った。

「お父さーん」

ピンポンピンポンピンポン。次の日もはるとの家に来ていた。

「蓮……。まだお父さん帰ってきてないよ」

インターホンからはるとの声がした。

「そうなんだ、家入ってもいい？」

「えっと、お父さんがもう蓮と遊ぶなって」

「なんで？」

「ごめん……」

玄関は開かなかった。

商店街に戻ってきた。相変わらずどこもかしこも閉まっていた。いつもの公園を通り過ぎる。ここから先は、食器や古着、金券ショップが多く、蓮には興味のない店が続く。だからいつも、ここで引き返していた。来たのは父とよく散歩したとき以来だった。

ただ歩いて、彷徨い歩いて、次第に商店街の終わりのアーチが見えてきた。アーチをくぐり、商店街の外に出る。一本大きい道路を挟んだ向かい側に、不自然なほど真っ白な、大きい壁があった、数年前にはまだなかった、駅前のスーパ―だった。

導かれるようにして中に入ると、外とは少し違う寒さをしていた。入ってすぐの青果コーナーでは、軽やかな音楽が流れ、キャベツを宣伝している。蓮は少し進んで、精肉コーナーで立ち止まった。精肉の向かいに、国産鶏のからあげが何種類もずらりと並んでいた。一番大きいからあげが入ったバックを手取る。

スーパ―を一巡して、反対側の出口から出ようとしたら、きみ！　と呼び止められた。

「それ、お金払った？」

レジのアルバイトをしている若い女性だった。

「なんで？ 商店街のおっちゃんにくれたよ」

「でも商品はお金払わなきゃダメだよ」

背の低い蓮を覗き込むようにしゃがんで、言った。

「一個くらいいいじゃん」

「そういうわけにもいかないんだって。代わりに、コレ」

手からあらあげのパックが取り上げられ、レジに置いてあるサービスの飴を一個、手渡された。これじゃ足りない。

「次からは親御さんにお金もらってから来てね」

蓮は返事をしなかった。

小さなイトインスペースのイスに座り、飴を口に放りこむ。客はあまりおらず、イスは全部空いていた。壁にたくさん、マスクの着用にご協力くださいという張り紙がしてある。遠くから眺めていると、店員も客も、みんな顔の下半分が白かった。

柱に取り付けられた時計の長針が、正確に十二を指す。それと同時に、チャンチャラリンと音楽が流れた。

『ご来店ありがとうございます。ただいま、十四時をお知らせいたしました』

ふと見ると、さつき蓮に飴を渡した店員がレジを離れ、同じ制服を着て、同じ帽子を被った人に入れ替わった。みんなずつといらつしゃいませを連呼していて、だれもなにもくれなかった。

*

「おい」

野太い声が飛んできて、蓮は振り返った。

「ずっといるけどなにも買わないし、服も汚れてるし、ハッキリ言って迷惑なんだ。他のお客様も気味悪がって来なくなるし。出てってもらえるか」

ガタイのいい男の人が、毛深いうでを組んで見下ろしていた。名札には、店長と書いてあった。ほら、と言った感じに、あごで出入口の方を指す。ギラついた、怖い目。はじめて向けられるタイプの圧だった。

蓮はじりじり後ずさって、走って出て行く。

「次来たらつまみ出すからな」

背後からそう聞いた。口々に何か言いながら、客が蓮の方を見ているのが、背中越しでも分かった。

「ほら、あの子よ。はるとくんのおうちが付きまとわれて迷惑だったって言った」

「私聞いたことある。前に商店街で乞食みたいなことしてた子よ」

「どう育ったらあんなことできるのかしら」

帰っても、家の玄関は開いていなかった。じっと扉の前で、夜になるまで座っていた。

「……お父さん、どこ？」

立ち上がって、ふらふらと歩き出す。昼、逃げかえるように帰ってきた道を引き返した。

商店街のアーチをくぐり、一キロほどある誰もいない道を、一人。街灯がずっとまっすぐ続いていて、蓮はそれを綺麗だと思った。

スーパーに着くころには、くつの底は剥がれ落ちて、裸足になっていた。自動ドアには、営業時間九時～二十二時と書いてあった。店員に見られないように、そろりと中に入る。

店内の時計が正確に九時五十二分を指していた。客は一人もいなくて、売り場は品薄になっている。青果コーナー横にある花を一本抜き取って、大事に持った。精肉コーナーへ行って、まだ残っていた半額のからあげのバックを、かき集めてうでに抱いた。

落とさないように抱えて、レジから遠い方の出入り口に走っていった。張り紙がたくさんの自動ドアがゆっくり開いて、商店街のアーチが現れる。冷たい床を裸足で蹴って、スーパーの外へ出る。刺さるアスファルトも気にならなかった。走る。まばゆく光るスーパーを背に、暗く、ずっと真っすぐ続く商店街の道へ。

「おい！ お前、待て！」

野太い声が後ろから飛んでくる。無視して走った。

——でも、両手がふさがったままでは走りづらくて、足がもつれてこけた。からあげが、石のタイルの上に散乱する。

「っ捕まえた」

息を切らしながら、店長が追い付いてきた。肩をがっしり掴まれる。ケガをしたひざから血がだらだら流れ出す。

「来いっ！」

ごつい手で、スーパーの方へ引っ張られていく。握りしめていた花も落としてしまった。

関係者以外立ち入り禁止と書かれたドアの奥へ連れていかれた。ドアが閉められ、内から鍵をかけられる。真っ白な壁に四方を囲まれた。

「出禁にされた腹いせか？ コラ」

蓮は首を振る。

「じゃあなんでだ、言ってみろ」

うつむいて、答えなかった。

「当然、学校や親にも連絡するからな」

ばっ、と顔を上げる。

「困るか、連絡されたら。でもな、やったことには責任が伴うんだ。お前が悪いんだぞ」
からあげの賞味期限なんて、あと数分で切れるのに。あと数分で廃棄なのに。

「おい、親の電話番号言え。家と携帯、両方だ」

「お父さんの番号——」

蓮は素直に教えた。店長はメモし、受話器を上げた。

「……………でねえな」

携帯の番号にもかけた。

プルルル、プルルル。徐々に、蓮の頭が下がっていった。

——妄想を、していた。後ろの扉を開けて父が入ってきて。蓮の頭を下げさせて、一緒に謝ってくれて、全部終わってから、ほら、帰るぞって、手を引っ張ってくれて。自分を見られる、そんなお父さんを。

電話に出なかったのか、店長は受話器を置いた。

「お前の親どうなってんだ。両方出ねえぞ。まあいい、次学校だ」

追い出されるようにして、解放された。放置されて血がカピカピに固まった足を引きづって、一人で家に帰った。家の鍵は開いていた。

変わらず、酒の匂いがする。

あの人はすでに帰ってきていて、寝ている背中が見えた。

「おい！」

そう怒鳴って、その背中に空き缶を投げつけた。父がむくつと起き上がる。それに構わず、

投げつけるのを止めなかった。

「あ？ なにすんだお前」

「うるさい！ お前なんか、出て行け」

「なんだその態度は！ 俺はお前の父だぞ！」

「お前が、お父さんなもんか」

そう叫んで、立ち上がるとうする父に体当たりをした。体制を崩して、布団の上に二人で倒れる。押しのけようとする手を強引に振り払って馬乗りになる。そして、殴った。はじめてのことだった。

「い、痛っ。ちょっと待て、ぐ……」

夢中で拳を落としていて、あれ、と思う。

「蓮、悪かった。謝るから勘弁してくれ」

抵抗してくる力も、殴り返してくる拳も、弱すぎた。あの大きな手を思い出す。自分の顔を覆い尽くしてしまうほどの手を。見上げるほど高かった背を。

「この通りだ、すまない」

殴ってみて、初めて気が付いた。思っていたよりもずっと、父は細くて弱かった。

カーテンの隙間からもれる街灯が、部屋のほこりをきらきら照らしている。転がった酒やカップ麺の容器に目をやった。そしてゆっくり、父の顔に目を向ける。ずっと見ようとしなかったから、分からなかった。ずっとこんなところで生活していた父は、ひげが伸びていて、不健康そうな顔色で、なによりひどく老いて見えた。一瞬、父の死が脳裏にチラついた。

入学式が延期になって、忘れていた。自分は中学生で、もうすっかり大きくて、大人になっていて、父の力を抜かしていた。なんだか、おびえてうずくまる父が哀れに思えてきた。

蓮は静かに立ち上がって、よたよた歩きます。外に出て玄関を勢いよく閉めた。その場に座り込む。玄関に背を預けて、静かに泣いた。

落ち着いてから、ポケットに入れっぱなしになっていた番号を出し商店街のおっちゃんに電話をかけた。

*

「注文入った！ からあげしょう油、六個入り」

「はい！」

それを聞いて蓮は衣をまぶしてある鶏肉を、油に落とす。

電話をして、おっちゃんが駅前からあげの移動販売をしているのを知った。久しぶりに会った蓮を心配するおっちゃんに勝手に口が、働きたい、からあげが作れるようになりたいと、そう言った。

「からあげ六個！ お待たせいたしました、ありがとうございます！」

客の親子に、元気よく言ってからあげを渡す。

最近はずしずつ、父との会話も増えてきた。それに伴って、人とも話せるようになってきたと思う。そしてなにより、人から食べ物をもらうだけではなくなった。

夕方、店を閉める時間帯になって、おっちゃんが旗を片付け始める。

「おっちゃん、からあげちよっと作って持って帰っていい？ もちろんお金は払うからさ」「もちろん。ただお金はいらねーよ。お前が作ったもんなんだからな」

揚げ終わったあつあつのからあげかごに入れ、帰り道の商店街、自転車を飛ばす。冷めないうように。

合鍵は父からもらっている。玄関を開けた。前のような匂いは、壁に染みついていたものの和らいできている。今日休みの父は、部屋にいた。

玄関の音を聞いて父は振り返る。まだ少し、不健康そうな顔だ。

「ああ、蓮。おかえり」

「これ、からあげ」

「蓮が、作ったのか？ これを」

父は蓮の手からからあげを受け取る。

「うん。からあげも体に悪そうだけどインスタントよりマシでしょ。だし、あったかいじゃん」

外しか見ていなかった。でも、ずっとここにいたんだと思う。

「すごい、すごいまいよこれ。すごいな蓮は。自慢の息子だ」

「うん、お父さん」

蓮はそう言って笑った。